

『訳準笑話』の書誌と諸本

荒尾 禎 秀

要旨 江戸期に刊行された漢文体の笑話本は、戯作ではあるが漢語学習にも資するところがあつたと推測されている。本稿はその裏付けのための基礎資料として、漢文戯作の一本『訳準笑話』がどのくらい読まれたものであるかを明らかにしようとした。本書の書誌調査により、1824（文政七）年から明治初期にかけて、版木はすべて同一であるが、少なくとも12回の刷りが重ねられたことが明らかとなった。ただし、具体的には版元や見返しなどの状況から、版を重ねた経緯には不審な点もある。

キーワード：『訳準笑話』、漢文戯作、『雑字類編』

本書は『日本古典文学辞典』（岩波書店一九八五）に「一冊。断本。津阪東陽作。文政七年（一八二四）刊。」「巻頭には『開口新語』に倣い「初学文ヲ習フ物ノ為ニ聊カ訳準ノ資ニ充ツル」意図が記される。」「新作も多少まじるが、大方は安永小咄を主体に、中国笑話や軽口咄からも単純な滑稽話を選び漢訳化したもので、分かりやすく俗語を注記するなど、笑いの純度は高い。」「一九八話を収め、漢文体笑話本の代表作として、文政九年版ほか後印本も多い。」（武藤禎夫執筆）とある。つとに石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』（一九四〇）の三二一及

び三四〇頁に、漢文体笑話としての歴史的位位置や作者、内容などが概説されている。森銑三（一九九四）は「民間に伝承せられた、土臭い、田舎趣味の話を多く集めている点」を評価し、近くは竹内肇（一九九八・一九九九）、荒尾（二〇一一）の論考があり、その影印も武藤（一九七九）により行われており、書誌も述べられているが、諸本の状況については明らかではない⁽¹⁾。

本稿は手持ちの『訳準笑話』を中心に、若干の図書館蔵の諸本の書誌を調査した結果をまとめて述べるものである。以下、断りのない場合は架蔵本による。その目的は、本書がよく流布したことを証すところにある。すでに荒尾（二〇〇八）は江戸期和刻本『笑府』三種のいずれもが明治期に至るまで非常によく流布したことを書誌的な観点から考察した。江戸期の漢文戯作の盛行には読んで楽しむ目的とは別に、漢語語彙の習得という事情が基底には共通してあったものと推測する。そして江戸期の漢文戯作の流行は明治期の漢語盛行を可能にした基盤を作ったのではないかと予想する。その検証の基礎作業として、漢文戯作の流布状況の実態解明が必要だと考える。本書の流布状況の調査がとりわけ有意義であるのは、その末尾に「初学作文須用書冊」と題する書目一丁があり、そこに挙げられた書籍の中に『雑字類編』がある点である。『雑字類編』が漢文戯作と関連があるかは不明であるが、荒尾（二〇一一）でも見たように漢文戯作との関わりについて注目される点がある。

先学がすでに述べていることと重複するところもあるが、書誌の概要をまず述べる。定説通り、文政七年の刊記を持つものが初印本であると考えるので、文政七年の刊記を有する架蔵本に従い述べる。

【作者】先に引く『日本古典文学大辞典』では、序に「匏庵」とあるにより津藤堂藩儒の津阪東陽とする。ただし、序文に「余勸書肆刊行。」とあるのは仮託したものとという理解をしなければならぬ。石崎（一九四〇）は「作者に就いては本板には明記してゐないが文政九年稽古精舎板に『東陽津先生著』とある」にとどめる。

【書名】『国書総目録』などにより整備された国文学研究資料館の「日本古典籍総合目録データベース」では「統一書名」を「訳準笑話」とし、「別書名」を「訳準笑話百則」とするが、内題は「訳準笑話百則」である。尾題は「訳準笑話全」とある。

【刊年】序の末尾に「戊寅春社日」とあるので一八一八（文政元）年に成立、また奥付に「文政七年甲申正月発行」とあるによれば刊行年は一八二四年。

【表紙】黄色。262×178ミリ。単枠の刷り題簽「訳準笑話 全」（167×24ミリ）を付す。この題簽は寸法、文字とも明治刷本を含め同一である。

【見返し】地紙（白色）に、単枠有罫三行で、「初学習文階梯／正統合二百則」／訳準笑話／陽華書房鐫蔵」とある。この「正統二百則」とあるのは、本文の話柄の数に依っているが実際にはその数は百九十八である。蔵版元の印や魁星印はない。

【構成】柱題は全丁「訳準笑話」で、丁付けは「序 一」から「序 二」まで、「正編 一」から「正編 二十」まで、「続増 廿一」から「続増 三十九」まで、「書目 四十」で、合計四十二丁であり、本文は三十九丁である。

話数は、本文二十丁裏三行目に「自是以下続増」とあるところまでに一丁表の巻頭部分を除くと百三話、その四行目以降に続けて九十五話ある。内題の「百則」と実際の話柄の数との差異、及び「正編」と「続増」部の丁付けが連続しているうえに両者の境目が丁の中途になっていることから、内題は本書の前半部分についての書名ということになる。三十九丁裏の跋文様の一文によれば、「笑話百則」をものしたのち、笑話をよくする按摩師から更に「百許則」を得たとあるので、そうであれば当初は「訳準笑話百則」であったのであろう。この点、いささか整いにくい書物とも言える。本書の書名として内題の『訳準笑話百則』を採りたいのはこのような事情による。

本文は訓点付きの漢文体笑話であるが、単語ないし句の左に比較的多くの訓をもつ。

「書目」一丁「初学作文須用書冊」には二十八種の書籍をあげる。そのうち「右五種訳解名物称謂者」として『名物六帖』『雑字類編』『字語編』『医案類語』『文藻行潦』を挙げる⁽²⁾。この書目一丁は明治期のもの（本稿で後述する「(12) 東京版」）を別として、諸本がこれを有する。

【奥付】刊記「文政七年甲申正月発行／書林／京都 鉛屋安兵衛／同 植村藤右衛門／大阪 柏原屋清右衛門／伊勢津 山形屋傳右衛門」⁽³⁾。

見返しの「陽華書房」が版元で、津の山形屋かと推測するが、井上和雄ほか（一九七〇）『慶長以来書買集覧』では確認できず未詳。

刊記の前部分には刊行書冊広告として「紀事集覧／初学訳準名文／三冊嗣刻」とある。ただし『紀事集覧』は、この書名では「日本古典籍総合目録データベース」や「全国漢籍データベース」（全国漢籍データベース協議会）等には見いだせない。

次に、流布の概要を述べる。

披見した本書を、推定される刊行順に排して、以下に述べる。

まず述べておくべきは、本書は明治に至るまで刊行されているが版木は同一である、ということ。序、本文及び書目については部分的な埋木などもない。したがって、ここでいう刊行順とは、正しくは刷りの順序の謂いである。

諸本の異同と刊行順は、見返しや刊記、全冊についての文字の欠刻や罫線のキレについての八十箇所ほどの調査を総合して判断した。

その結果、刷りの違いは十二種類になる。それを、略称を以て印刷された順序に記せば次のようになる。

(1) 文政七年陽華書房蔵版

- (2) 文政九年稽古精舎蔵版
- (3) 文政九年小品堂蔵版 A
- (4) 文政九年小品堂蔵版 B
- (5) 文政九年小品堂蔵版 C
- (6) 文政九年小品堂蔵版 D
- (7) 篠田伊十郎版
- (8) 文政九年陽華書房蔵版
- (9) 文政九年小品堂蔵版 E
- (10) 文政九年文光堂蔵版 A
- (11) 文政九年文光堂蔵版 B
- (12) 東京版

(1) 文政七年陽華書房蔵版

【表紙等】前記。

【欠缺・キレ】架蔵本は文字の欠缺や罫線のキレは少なからずある。例えば、文字の一部の欠缺には、三丁ウ五行目「矣」、十四丁ウ二行目「也」、同ウ十行目「指」、廿九才四「勉強」の左振り仮名「シンボウナサレ」の「ン」「ボ」、三十二ウ二「大」などがあり、罫線のキレには、三才三の「癡」の左や十八ウ二の「真」の左、廿一才七「腕者」の左、廿三才三「宿」の左、三十三才九「開」の右、三十五ウ六「女」の左などに見られる。また三十五才右匡郭の下から1センチのところには4ミリのキレが、三十九ウの左匡郭中ほどには傷のように欠けている状態がみられ

る。このような箇所は少なからず見受けられる。

【考察】右の既存の欠刻やキレは、同じ文政七年版でも、より先に刷られた本の存在を可能性としては考えさせるものだが、今は当初からあったものと考えておく。

(2) 文政九年稽古精舎蔵版

【表紙】黄色。257×176ミリ。

【見返し】地紙、薄梔子色（あるいは地紙の白が変色したか）。無罫だが竜のような飾り模様に囲まれて「東陽津阪先生著／習文／階梯」訳準笑話／稽古精舎鑄蔵」とある。蔵版元の印はない。(1)とは「訳準笑話」の文字も全く違い、別な板によるもの。

【奥付】刊記「文政九丙戌正月発行／製本所／伊勢津堅町／山形屋傳右衛門」。この刊記の前に「稽古精舎蔵版」とあり、続いて『紀事集覧』の広告がある。そこには(1)と違って「四冊」とある。

【新たな欠刻・キレ】調査範囲では(1)と同じで、新たに生じた文字の欠刻や罫線のキレは認められない。しかし、十四ウ六「愧」の左の罫線部分が(1)はほぼ真直ぐだが、(2)は「逆くの字」型に右に歪む。なお、刊記の「伊勢津堅町」の「津」の傍の二画目に欠刻が生じており、これはこの後の「小品堂蔵版」とある本も同じである。

【考察】刊行年からも(1)の後印本。山形屋を書林や書肆でなく「製本所」としているのはどういう事情なのか。「稽古精舎」と山形屋との関係が確認できない。見返しの蔵版者名が「陽華書房」から「稽古精舎」に変わった事情、また京都、大阪の三書肆が消えて津の山形屋のみになった事情も未詳。見返して著者を津阪東陽としたことと関係があるのかもしれない。「東陽津阪先生著」は(3)以降は消えるので、にわかには津阪東陽が本書の著者だとはしがないのではないか。『紀事集覧』の冊数「四冊」はこの後そのまま続く。

(3) 文政九年小品堂蔵版A

【表紙】黄色。250×172ミリ。

【見返し】地紙、白色。(2)と同じ竜の飾り模様囲まれて、無罫で中央に「習文／階梯」訳準笑話」とある。

その文字は(2)と同じ。(2)の板木から「東陽津阪先生著」「稽古精舎鐫蔵」を削除している。竜のような模様の左側部分の上から7センチの部分から5ミリ強欠けている。蔵版元の記載や印はない。

【奥付】刊記、広告も(2)と同じであり同一の版木であるが、「稽古精舎蔵版」とあるところが「小品堂蔵版」に改められている。

【新たな欠刻・キレ】新たに生じた文字の欠刻は、序一ウ八「則」の左に付された返り点「一」、廿九ウ一「大」の二画目。

罫線のキレでは、一ウ四「曲」の右、一ウ九「之」の左、四オ一「奴窃」の左、十ウ一「客聞」の右、三十一オ十「三」の左、三十六オ五「往」の左。(2)で指摘した十四ウ六「愧」の左の罫線部分は、「逆くの字」型の下部分が欠けて3ミリほどのキレとなっている。

【考察】「小品堂」は井上和雄ほか(一九七〇)に記載がなく未詳。単純に考えれば、津の山形屋が何らかの事情で「稽古精舎」を「小品堂」に改称したということになる。

(4) 文政九年小品堂蔵版B

【表紙】縹色。259×174ミリ。

【見返し】地紙、白色。(蘭 菊／梅 竹)の四文字がある。(

【奥付】(3)と同一の版木によるもので、刊記、広告とも全く同じである。

【新たな欠刻・キレ】新たな欠刻は、序一〇一「話」の左に付されていた返り点「一」、廿四〇七「禁」の九画目。罫のキレは、十三ウ八「廿四」の右、廿三才四「問之」の左、廿四才四「創日」の左、同「日」の左、同才六「所載」の左、同才八「土」の左、同ウ一「破罐」の左、三十一才五「姑呻」の左にある。

このほか、(1)ですでにキレがあったが、(4)においてさらにそれが大きくなったものに、廿四才十「福」の右(微小↓2.5ミリ)、廿四ウ三「本属」の左(2.5ミリ↓9ミリ)。ただし左振り仮名「ノ」の左には罫線が残っている。(3)、三十一ウ八「壯」の左(1ミリ↓3ミリ)がある。また十四ウ六の「愧」のキレは7ミリほどに拡大した。

【考察】表紙は元表紙だが、見返しの紙は当初からのものであるかは不明。そこに書かれた四文字は大ぶりの楷書で、手書きと思われる。また奥付の「小品堂」とある右側には墨の汚れがあるが、あるいは「小品堂蔵版」と埋め木をしたための汚れか。なお、本書の版面は諸本に比して悪く、墨付きにムラの目立つ丁が多い。

※ 今野真二氏蔵本による。

(5) 文政九年小品堂蔵版C

【表紙】薄浅葱色。257×178ミリ。

【見返し】地紙、白色。単枠有罫三行で、「初学習文階梯／正統合二百則／訳準笑話／小品堂蔵版」とある。(1)と同板で「陽華書房鑄蔵」を「小品堂蔵版」と改めたもの。蔵版元の印はない。

【奥付】(3)と同一の版木によるもので、刊記、広告とも全く同じである。

【新たな欠刻・キレ】新たな欠刻は、廿六ウ二「亦」の四画目、同ウ三の「不」の三画目。

罫のキレは、十一ウ二2字目「日」の左。廿四才六「所載」の左は(4)では1.5ミリのキレであったが、(5)以降は3ミリとなり、廿四ウ三「本属」の左は10ミリに拡大している。

※ 東京都立中央図書館桑本文庫蔵本による。

(6) 文政九年小品堂蔵版D

【表紙】朱色。260×176ミリ。

【見返し】(5)と同じ様式、内容で、同板である。

【奥付】(3)と同じ形式、内容で同板である。

【新たな欠刻・キレ】(5)までとの最たる違いは、四十オ(書目)の縦の匡郭の中央部分に欠刻が三箇所、5ミリ、1センチの間隔で生じている点である。また、三十八ウ十「人」の一面目は(3)以降に兆候があるが、ここに至って明確なキレとなっている。十六オ三「一」の右のキレは当初からあるが、ここでは3ミリに拡大した。

※ 京都大学附属図書館谷村文庫蔵本による。

(7) 篠田伊十郎版

【表紙】薄縹色。256×178ミリ。

【見返し】地紙、白色。(3)と同一。模様の欠刻も同一。

【奥付】「弘所」として「京都 風月荘左工門／江戸 岡田屋嘉七／大阪 秋田屋太右工門／同 河内屋茂兵衛／伊勢津 篠田伊十郎」とある。刊年の記載や書冊の広告はない。

【新たな欠刻・キレ】新たに、十三ウ八「孝」の三画目に欠刻がある。また、四十オ(書目)の縦の匡郭には下方に4ミリの欠刻が生じている。

なお、十ウ二の「目」の字は(4)(5)(6)では三画目にひび割れのような崩れが見えているが、この(7)

では欠刻となっている。

【考察】(5) から(7) では新たな欠刻やキレは多くないから、あるいは近似した時間内で刷られたか。この奥付の五書肆はここで初めて出現し、「大阪 秋田屋太右工門」が(12) に出現するのを除き、他には出てこない。これまでの諸本との関連は未詳。篠田伊十郎は同郷の谷川士清の大著『和訓栞』の文政十三年、文久二年の奥付に名を出す⁴。また明治二十年刊の『蘭玉叢話』(三重県・山本裕)の発兌人「篠田伊十郎」と同一人物であれば、この(7) が刷られた時期は幕末明治までさがる可能性はある。

※ 津市津図書館橋本文庫蔵本による。

(8) 文政九年陽華書房蔵版

【表紙】薄縹色。257×176ミリ。

【見返し】地紙、白色。(1)と同じ位置に無罫三行で「初学習文階梯／正統合二百則」／訳準笑話／陽華書房鐫蔵」とある。「陽華書房鐫蔵」の末尾一字にかかって長形朱印「洞津陽／華蔵版」の蔵版印が押されている。

【奥付】「小品堂蔵版」。刊記、広告とも(3)と同一。

【新たな欠刻・キレ】(7)と同じで、新たなものはない。

【考察】欠刻やキレの状態からは(8)は(7)と同一の刷と思われるが、見返し、奥付けが違うので別の種類とした。

この見返しについては疑問がある。なぜ見返しと奥付とで「陽華書房」「小品堂版」と違うのか。見返し、奥付はその様相から(1)と同版でその匡郭枠罫を削ったものと見られるが、そうだとすると、(1)の見返しは(4)の小品堂に受け継がれたのに、なぜまたここで(1)と同じ陽華書房に戻るのか。また(1)にはない蔵版

印が押されているのはどう考えたらよいか。さらに、欠刻やキレの状況から刷りの順序の推定は正しいという前提で考えると、匡郭を削ったとすれば(9)以下でまた匡郭のある見返しに戻るのはどう説明するか。例えば次のようなことがあるかもしれない。陽華書房が増刷をしようとしたが何らかの事情で(5)の見返しが使えないために陽華書房は被せ彫りで(8)の見返しを作り、蔵版印も付した、そしてこの見返しは何らかの事情で再び使われることはなかった。匡郭のある見返しのほうは小品堂によってその後も(9)などに見るように使われた。

(8)の見返しを被せ彫りではないかと考えて精査すると、(1)とは次のような違いが、極めて微妙であるが指摘できる。(8)は「初」の偏の三画目がやや長い。「文」の二画目と四画目がついている。「續」の隣の「貝」の部分の左払いがやや長い。「準」の一画目、二画目がやや丸い。「笑」の九画目の入筆の形状が違う。「陽」の隣の二画目がやや丸い。「華」の六画目がやや長い。「蔵」の終画の点やや小さい。その他、いずれも微細な違いではあるが指摘できそうではある。この異同は墨付きの関係かもしれないとも思うほど酷似しているので、被せ彫りの見返しであるかどうかは同種の刷の本を披見してなお考えたい。

(9) 文政九年小品堂蔵版E

【表紙】黄色。230×158ミリ。

【見返し】地紙、紅色。(5)と同じく、単棹有野三行で「初学習文階梯／正統合二百則」／訳準笑話／小品堂蔵版」とある。蔵版元の印はない。

【奥付】「小品堂蔵版」、広告文・刊記とも(3)と同一。

【新たな欠刻・キレ】新たな欠刻は序二ウ八の落款(陽刻)「痴叟」の「叟」の最終画末尾、十二ウ七「日」の二画目、十六ウ一「日」の四・七画目。三十六ウ三「日」の右の読点の一部分。

キレ等は、十二オ一「何」の右の匡郭（三角状のキズ）、十二ウ三「留」の左、十三オ八「婦」の左、廿オ七「日」の左、廿二ウ七「得」の右、廿六ウ六「下」の左、三十六オ五「惰」の右。十三オ七「以聴」の左には2ミリのキレがあるが、ここはこれ以前の諸本は極めて微細なキレ。四十オの縦の匡郭中央部分にはすでに三箇所キレがあったが、(9)ではもう一箇所キレが生じ、四箇所となった。したがって、縦匡郭には下方部のキレとあわせて都合五箇所キレがあることになる。

【考察】これ以降は半紙本となる。匡郭の寸法からみると(1)以来の大本の上部を切ったもの。(8)で述べたように、欠刻や罫線のキレの状況からはここに述べている刷りの後先の順序は揺るがないと考えるが、見返しに関しては(8)(9)の連続性に疑問がある。

(10) 文政九年文光堂蔵版A

【表紙】薄茶色。228×160ミリ。

【見返し】地紙、青緑色。単枠有野三行で「初学習文階梯／正統合二百則」／訳準笑話／文光堂蔵版」とある。蔵版元の印はない。

【奥付】「文光堂蔵版」、広告文は(2)と同一。刊記の刊年は従前だが「尾張書肆／名古屋本町通十一丁目／梶田勘助「求／板」とある。

【新たな欠刻・キレ】欠刻は、三十二オ一「殆」の偏の三画目（払いが欠）及び傍の終画、三十二オ一「欲」の傍の二画目及び三画目（払いが欠）、三十四ウ五「大」の一画目、三十四ウ六「倭」の傍の二画目、三十六オ四「語」の偏の六・七画目。

キレは、序二オ右匡郭（「機警」の右）三箇所、廿三オ七「可」の右、廿三オ七「可写」の左、廿三ウ三「吾聞」

の左、廿三ウ三「無妨」の左、廿八ウ一「隣」の左。十一ウ十「問庶」の右には(3)以来微細なヒビができていたが、ここに至って2ミリのキレとなった。三十五オの右匡郭の下から1センチにある4ミリ程度のキレは(1)からあるが、加えて下から6センチの位置に新たに8ミリのキレができている。

【考察】奥付「文光堂蔵版」の「堂蔵版」の右と「堂蔵」の左に墨の汚れが見られるが、これは埋め木によるものか。「文光堂」は井上和雄ほか(一九七〇)には見えず未詳。題箋の料紙の地色は他と違って縹色である。同板での色違いと思われる。

(11) 文政九年文光堂蔵版B

【表紙】黄色。228×157ミリ。

【見返し】(10)と同じ。蔵版元の印はない。

【奥付】(10)と同一。

【新たな欠刻・キレ】新たに認められるキレは、二オ十「後」の左、十ウ八「婦」の左、廿四ウ一「火視」の左。また十六ウ五最終字の「日」の左は下匡郭から5ミリの位置より上にキレが生じている。

【考察】(10)と同時期の刷りかと思われるが、右に指摘したように複数個所に新たなキレが認められる。

(12) 東京版

【表紙】黒紫色。233×158ミリ。

【見返し】地紙、紅色。(3)と同じ無罫飾り模様で、中央に「習文／階梯」訳準笑話とある。飾り模様の左側部分の欠刻の状態も(3)に同じ。蔵版元の印はない。

【奥付】「書籍売弘所／東京 須原屋伊八／同 和泉屋金右衛門／西京 勝村治右衛門／同 北村四郎兵衛／大坂 河内屋喜兵衛／同 秋田屋太右衛門／名古屋 永楽屋東四郎／同 秋田屋源助／岐阜 三浦源助「求／版」」。これまでのものとは全く異なり、刊年や広告もない。

【新たな欠刻・キレ】加えるべきものは調査範囲では見出せない。

【丁数】四十丁目（書目）がない。

【考察】「東京」とあるによって明治期のものと考ええる。版元は岐阜の三浦源助であろう。三浦源助は篠田伊十郎らに関係した『和訓栞』にかかわる。見返しが(3)と同じであることをどのように考えればよいのかは未考。「書目」一丁が削除されている点が注目される。

以上、これまで披見しえた諸本に基づき、『訳準笑話』の流布状況を見てきた。本稿末尾にその「早見表」を掲げた。文政七年以来明治期まで、五十年ほどの間に十二回は増し刷りされていたことが判明した。しかし、書誌に不明な点もあり今後の検討が必要である。またここに挙げた十二種類以外に新たに刷られた形跡を示す本がある可能性は十分に考えられる。機会を見てなお調査をしたい。

【付記】本稿は科学研究費補助金「東アジアの笑話と日本文学・日本語との関連に関する研究」（研究代表者島田大助・課題番号24520244）による研究成果の一部である。

注

(1) 武藤禎夫（一九七九）の解題、及び竹内肇（一九九八）に引用されている長澤規矩也（一九六九）に基本的な書誌情報は

述べられている。『三重の風土と文学——展示資料目録——』（三重大学附属図書館・二〇一三）の『訳準笑話』の解説（吉丸雄哉執筆）にも若干書誌が記されている。

なお、『断本大系』第二十卷所収の影印は、見返し、奥付は「文政七年」版のものであるが、序・本文・書目は内部徴証からそれとは違い、本稿でいう（5）小品堂蔵版Cと同一か、それに近似したものであると推定される。

（2）このほかに「用字格」「訊文須知」など「講解文語」十三種、「初学文談」「文章披雲」など「作文法程」八種（実際には七種）、「習文録」「尺牘式」など「肆習文章」三種の書名を挙げる。この書目の意味するところについては稿を改める。

（3）文政八年刊の『孝経發揮』には鉛屋安兵衛（筆頭）、柏原屋清石兵衛、山形屋伝右衛門（末尾）の書肆名がある。この本には文政六年の「津藩国校督学兼侍講津阪孝綽」の序文があり、見返しには「有造館蔵版」（有造館は藩校）とある。

（4）『和訓栞』「於の部」の後にある文政十三年の奥付には須原屋茂兵衛を筆頭に、風月荘左衛門を含む五書肆が名を連ねるが、篠田伊十郎はその末尾にある。また文久二年の奥付には十三書肆の名があり、須原屋茂兵衛を筆頭に岡田屋嘉七、河内屋茂兵衛など東都、大坂の書肆の間に「洞津 篠田伊十郎」の名がある。同郷の士の著作を多く出版した、津では力のある書肆であったと思われる。

参考文献

- 荒尾禎秀（二〇〇八）「和刻本『笑府』の書誌と諸本」『清泉女子大学紀要』五六
- 荒尾禎秀（二〇一三）「狂詩の漢字語——『東海道中詩』の場合——」『清泉女子大学紀要』六〇
- 石崎又造（一九四〇）『近世日本に於ける 支那俗語文学史』弘文堂（本稿は一九六七年刊清水弘文堂書房刊による。）
- 井上和雄ほか（一九七〇）『慶長以来書買集覧』増訂版 坂本宗子増訂 高尾書店（一九一六版の増訂版）
- 川上陽介（一九九九）『笑府』三種比較攷（上）『國語國文』第六十八卷第一号
- 竹内肇（一九九八）『譯準笑話管窺』『茨女国文』第十号
- 竹内肇（一九九九）『譯準笑話管窺補考』『茨女国文』第十一号
- 長澤規矩也（一九六九）『初印本と後印本』『書誌學』復刊第十六号（『長澤規矩也著作集 第四卷』所収 一九八三による）
- 武藤禎夫（一九七九）『断本大系』第二十卷所収『訳準笑話』・所収書目解題 東京堂出版
- 森銚三（一九九四）『森銚三著作集 続編』第十一卷所収『落葉籠』八十伝承笑話 中央公論社

【早見表】

(諸本)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)
十四ウ二「也」の三画目	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
三十三才九「開」の右	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ
序一ウ八「則」の返り点	×	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
三十一才十「三」の左	×	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ
二十四才七「禁」の九画目	×	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
十三ウ八「廿四」の右	×	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ
廿六ウ二「亦」の四画目	×	×	×	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
十一ウ二「二」字目「日」の左	×	×	×	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ
十六才三「一」の右 (a)	△	△	△	△	△	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ
四十才匡郭中央 (b)	×	×	×	×	×	キレ3	キレ3	キレ3	キレ4	キレ4	キレ4	キレ4
十三ウ八「孝」の三画目	×	×	×	×	×	×	欠	欠	欠	欠	欠	欠
四十才匡郭の下方	×	×	×	×	×	×	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ
十二ウ七「日」の二画目	×	×	×	×	×	×	欠	欠	欠	欠	欠	欠
廿二ウ七「得」の右	×	×	×	×	×	×	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ
三十四ウ五「大」の一画目	×	×	×	×	×	×	×	欠	欠	欠	欠	欠
廿三ウ三「吾聞」の左	×	×	×	×	×	×	×	キレ	キレ	キレ	キレ	キレ
十ウ八「婦」の左	×	×	×	×	×	×	×	×	×	キレ	キレ	キレ
廿四ウ一「火視」の左	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	キレ	キレ

〔欠〕は文字の欠刻がある、「キレ」は野線のキレがある、×はそれらが無いことを示す。

(a) の「キレ」は3mm。「△」には1.5mmのキレがある。

(b) の「キレ」の数字はキレの箇所数。

A Bibliographical Study of “*yakujun showa*” (訳準笑話)

ARAO Yoshihide

Abstract It is suggested that in the Edo period, collections of humorous stories written in Chinese characters (kanbun) were used not only as reading materials, but also for the purpose of learning Chinese vocabulary.

In order to provide support for this idea, this paper examines the extent to which the type of kanbun writing known as “*yakujun showa*” (訳準笑話：) were read.

The results of our bibliographical survey show that in the 50-year period from 1824 in the Edo period extending into the Meiji period there were a least 11 publications made of this type of writing. However, this assumption is based on the number of printing blocks.

Since there are uncertain points regarding changes of publishers and information written inside the book covers, there is need for further research.

Key words: “*yakujun showa*” (訳準笑話), bibliographical study, “*zatuji ruihen*” (雑字類編)